

まえがき

アウトプット型授業と「対話」の重要性

公民編と地理編に続き、『アウトプットする歴史の授業』の出版を迎えた。アウトプット型の授業について、詳細は公民編を参照いただきたいが、簡潔には「数時間単位の単元で構成し、最終的には生徒たちに感想をまとめさせる」授業のことである。本書（上巻）では、「30 古代から中世へのターニングポイントはどこだ!」、「40~42 戦国時代の石見(1)~(3)」、「46 なぜ銀閣に銀箔が貼られていないのか?」がこれにあたる。しかし歴史の授業においては、その内容が同質のものではなく、2つに大別できるような気がしている。すなわち1つは解釈型の歴史の授業であり、もう1つは地域教材を取り入れた歴史の授業である。

解釈型の歴史の授業

多様な文化が混在する欧米では、現在に残された史資料から過去を読み解くような解釈の能力を育てる解釈型の歴史の授業が重視されてきた。歴史は解釈の結果、表現されたものなのである。一方日本を含めた東アジアでは、それぞれの時代ごとに時代像や社会構成について理解するような理解型の歴史の授業がこれまで中心に据えられてきた。しかし、グローバリゼーションの高まりとともに、歴史を一義的にとらえるのではなく、多様な解釈が成り立つことを前提に学習することが、今後大切になってくる。生徒たちの学習意欲を高める上でも、欧米の解釈型の要素を、日本の理解型に融合させることが、私たちに求められているはずである。本書（上巻）の中では、「30 古代から中世へのターニングポイントはどこだ!」や「46 なぜ銀閣に銀箔が貼られていないのか?」がこれにあたる。

ただ、この時大切にしなければならないのが、インプット型の授業だ。例えば「30 古代から中世へのターニングポイントはどこだ!」は、獲得した知識を活用する授業になるため、その前提として知識を獲得する段階が必要である。ここでは「26 武士の起源」から「29 幕府による支配」までがその段階である。初期の武士が貴族に仕える存在であったこと、最高権力者である上皇が院の直属軍を設置したこと、保元の乱で都の政治の行方を武士が動かしたこと、平清盛が武士としてはじめて貴族のトップである太政大臣に上り詰めたこと、源頼朝が守護や地頭を設置したことに加え、鎌倉で武家政権を誕生させたことなどを、インプット型の授業で獲得させている。この獲得があって解釈型の歴史の授業が成り立つことを指摘しておきたい。

地域教材を取り入れた歴史の授業

益田が今まで何もない町なのかなって思っていたんですけど、こんなにすてきな歴史があるってことをはじめて知って、より益田のことが好きになりました。

2015年2月、「40 戦国時代の石見(1)」の授業を報道機関を含めて公開した。上記のコメントは、NHK松江放送局のニュースとして報じられた、インタビューを受けた生徒のものである。授業で取り上げた益田氏は現在の益田市域一帯を領有した中世の武士で、総数10,000点あまりに及ぶ益田家文書が残されている。また近世において、益田は城下町にならなかったこともあって、中世の遺構が数多く残されている。古文書と遺跡がセットで残されている益田のような存在は希有で、近年研究や発掘調査が進められている。この授業はその成果をふまえながら、益田市立益田中学校で実践したものである。授業を通して、生徒たちが益田についての理解を深めたり、愛着を感じたりする姿が印象的で、地域教材の魅力を確認することができた。

この実践から2か月後、吉賀町立六日市中学校に転勤したが、六日市を含めた現在の吉賀町域一帯は、益田氏ではなく、吉見氏が領有した。「41 戦国時代の石見(2)」にもあるように、吉見氏は隣接する益田氏とはライバル関係にあったため、六日市中学校では益田氏のことだけを取り上げるわけにはいかない。郷土誌などを読みながら、吉見方の城主の中で能美山城主だった横田与四郎の行動がユニークだったので、これを教材化することにした。生徒たちは吉賀町内にたくさんの城があったことや五郎丸城の名前の由来などに加え、与四郎の行動に驚き、その行動の背景を追究する。そして、それぞれの生徒たちが地域の戦国時代像をつかんでいくのである。

「42 戦国時代の石見(3)」でまとめたように、吉見氏は陶氏や益田氏によって三本松城を包囲されるが、その間隙を縫って毛利氏が陶氏の本拠地である若山城を攻撃したため、三本松城は落城しなかった。まさに難攻不落の城である。その後、陶氏を破った毛利氏が、やがて中国地方の覇権を握っていくことになる。先人たちの息づかいを感じながら、ローカルな視点からグローバルな視点へと視野を広げて学べたことにも、地域教材の魅力を感じることもできた。

ただ、やみくもに地域教材を授業の中に取り入れればよいというものでもない。ここでも知識を獲得する段階の必要性について指摘しておきたい。それ以前の学習の中で、倭寇や勘合貿易、大内氏、東アジア交易、下剋上などについて、より丁寧に扱ったことが生徒たちのアウトプットを支えているのである。

2019年4月、現在勤務している津和野町立津和野中学校に赴任した。「山陰

の「小京都」である津和野は、城下町が形成されたこともあり、中世から近世にかけての地域教材が豊富であることに改めて驚く。町もコンパクトで、生徒たちの身近なところに地域教材があふれている。例えば三本松城（津和野城）の話になれば、教室の自席から城跡を見上げようとする姿が見られるなど、こうした地域教材は学習への関心も高めてくれる。

本書（上巻）で取り上げた島根の地域教材は以下の通りである。

単 元	島根の地域教材
II 人類の誕生と古代文明	オオクニヌシ、スサノオ、出雲、神在月
III 古代国家「日本」の成立	隠岐の黒曜石、四隅突出型墳丘墓、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡
IV 天皇や貴族による古代国家	石見国、出雲国、隠岐国、ヤマタノオロチ、国譲り神話、出雲大社、出雲国風土記、柿本人麿
V 武家政権の誕生と危機	平家の落人伝説、後鳥羽上皇と隠岐、牛突き、吉見氏、木蘭
VI 動乱の中世と民衆の自立	後醍醐天皇と隠岐、尼子氏、石見銀山、益田氏、七尾城、雪舟、医光寺、万福寺、三本松城、三本松城の戦い、能美山城の戦い、万歳楽、鷲舞、弥栄神社、六日市、七日市
VII 欧州の変化と織豊政権	松江城、津和野藩 4 万 3000 石、李郎子
VIII 幕藩体制の成立	石見銀山、津和野藩、坂崎氏、亀井氏、笹ヶ谷銅山、日原銅山、津和野藩邸、近世山陰道、旧津和野廿日市街道、御船屋敷、六日市、津和野百景図、栗本格齋、殿町、本町
IX 幕藩体制の安定と動揺	亀井茲親、多胡外記、源氏巻、和紙、津和野藩蔵屋敷、此花乃井、坂崎出羽守、千姫事件、北前船寄港地、石見焼、石州瓦、近世松江の人口、松平直政、松平康定、隠岐国駅鈴、津和野藩校養老館、岡熊臣、桜蔭館、大国隆正、伊能忠敬の津和野測量、堀田仁助、太鼓谷稻成神社、永明寺、永田コレクション

古代出雲、中世津和野と益田、近世津和野など、地域教材を授業の中に取り入れることで、より充実した歴史の授業が展開できていることを実感している。1994年4月、島根県の中学校教員に採用され、以来支流である津和野川を含め、高津川流域にある中学校7校で勤務してきた。この経験が地域教材の開発に役立ったことは言うまでもない。一方、ここで取り上げた地域教材の多くは、津和野中学校の生徒たちに提示するためのものでしかない。同じ島根県でも松江市や出雲市などには津和野町とは異なる地域史があるし、県外ならばなおさらである。本書（上巻）でまとめた授業を、そのまま全国各地の中学校で追試することはできないが、それぞれに豊かな地域史があるので、それを地域教材として開発し、アレンジいただきたいと願っている。

既刊の公民編や地理編と同様、普段の授業をまとめた実践記録のような内容ではあるが、少しでも授業・教材研究の参考になれば幸いである。